

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第182号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成27年12月21日

セイタカシギ



2015. 5. 5 礼文郡礼文町

撮影者 富川 徹 (江別市)



も く じ

北海道初記録！レンカク	札幌市西区	山根 久佳	2
カタシロワシを撮ってしまいましたー2014年晩秋の千歳市長都沼ー	千歳市	角張 隆正	3
表紙の鳥（セイタカシギ）	江別市	富川 徹	4
コウノトリが石狩市聚富水田に長期滞在	千歳市	熊本 進誠	5
ツツドリはだまし上手？アオジはだまされ上手？	森林総合研究所北海道支所	川路 則友	6
シルバ通信⑧ 野鳥も住める都市とは？	北海道大学農学院森林生態系管理学研究室	島崎 敦	8
石川啄木の千鳥と蟹	北海道野鳥愛護会会長	小堀 煌治	9
福移探鳥会におけるウグイスの記録の不思議	札幌市北区	樋口 孝城	10
探鳥会ほうこく			12
探鳥会あんない・鳥民だより			16

北海道初記録！ レンカク

札幌市西区 山根 久佳

2015年8月8日午前8時18分から午前10時5分までの間、石狩市生振と札幌市北区篠路拓北茨戸川緑地の境界に当たる茨戸川の最端（図1）で北海道初記録のレンカクを観察しました。

この日は天候が晴れ風は穏やかで、観察地の川中に在る小島周辺に採餌に来るカワセミを撮影することが目的でした。カメラを約40m先の枝先に向けセットしカワセミを待っていると、小島の左端に見える流木にカモメが島陰から現れました。この流木は、観察地点から100m程あり、いつもはアオサギが採餌している場所です。

とりあえず双眼鏡を向けるとカモメではなく何やら見たことのない鳥、カメラを向けとにかく写しました。その後



レンカク 2015. 8. 8 石狩市生振



図1 ★がレンカク観察場所
（この地図は、国土地理院電子Webシステムのデータを一部改変して作成）

すぐ近くの川中より水面に生えた植物のある場所に飛び渡り、1時間以上留まっていたので、かなりの数の撮影が出来ました。飛翔するところを撮影したく、ねばって観察しておりましたが、私の集中力も切れふとした瞬間に飛び立ち、川面を川なりに飛び去って行きました。

自宅に帰り、北海道野鳥図鑑を調べたところ掲載がないのでグーグル検索で「水辺の鳥 しっぽ」で検索するとレンカクという南方の鳥だと判り驚きました。インド、東南アジア、中国南西部、台湾に分布し、希な旅鳥として本州以南の湖沼、ハス田、湿地などに渡来、これまでは青森県までの観察記録があるそうです（1993年、2013年）。ハスの上を渡り昆虫を捕食するのだそうです。

後で考えると、茨戸川のこの小島周辺は夏場に浮草類が

繁殖し、レンカクが立ち寄る環境があるのかもしれない。どういふ経路をたどってこの川に現れたのだろうかいろいろな疑問がわきました。

なお、撮影はパナソニックDMC-FZ200にフロントテレコンニコンTC-E15EDとパナソニックDMW-LTZ10を2段重ねで使用。35mm換算で約1260mmF4.5の超望遠仕様でした

が、レンカク迄の距離が100m超で小さくしか写せません。記録として少しでも大きく写したいとの気持ちで画質劣化覚悟でデジタルズーム機能を使いました。撮影した画像の大半は、カメラの機能のAI-ZOOMという画像を補正しながら拡大する機能を使い最大2倍の約2520mmで撮影したものです。

カタシロワシを撮ってしまいました —2014年晩秋の千歳市長都沼—

千歳市 角 張 隆 正

カタシロワシ… 見たことも、聞いたことも、持っている図鑑にも載っていない鳥を撮ってしまいました。

どんな鳥か調べてみると、カタシロワシ(肩白鷲、*Aquila heliaca*)は、動物界脊索動物門鳥綱タカ目タカ科イヌワシ属に分類される鳥で、夏季にヨーロッパ東部から中央アジアにかけての地域で繁殖し、冬季になるとインド北西部、中華人民共和国南部、アフリカ大陸北部へ南下し越冬する。日本には迷鳥もしくは越冬のため、まれに飛来するとのことでした。

全長はオス77cm、メス83cm、翼開張195-207cm。全身が黒褐色の羽毛で覆われ、頭頂から後頸にかけては黄褐色の羽毛。肩羽には白い斑紋が入ることから、和名の由来になっているそうです。

翼は細長く、飛翔時には長方形に見え、虹彩はオレンジがかった褐色。後肢の色彩は黄色。幼鳥は頭部や下面が黄褐色の羽毛で覆われ、雨覆や次列風切の羽毛の外縁(羽縁)が黄褐色とのことでした。

このカタシロワシを撮ったのは昨年(2014年)の11月3日です。この日の撮影目的は、10月31日に納品されたカメラ(CANON 7Dmark II)の試写と設定を詰めることだったので、相手をしてくれる鳥が多い、地元千歳市の通称「長都沼」(幅広用水路)の観察台に8時前から7DIIに600mmのレンズを付けて撮影を始めました。

天候は風が少しあるものの穏やかで、青空も広がり撮影日和です。朝からマガン、ヒシクイ、ハクチョウ、カモ

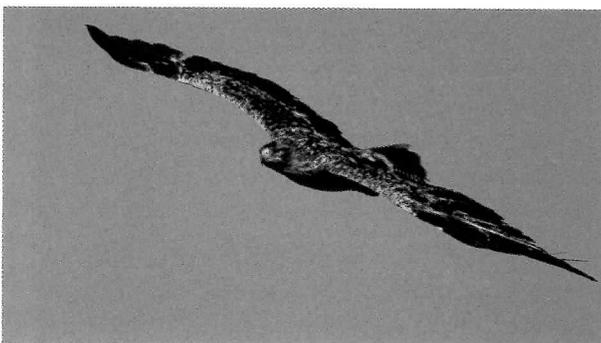
類、チュウヒ、オオタカが姿を見せてくれたので、飛んでくる鳥を片っ端から撮影し、写りを確認、カメラの設定を調整してまた撮影、確認の作業を繰り返していました。

午前10時を過ぎた頃、下流側から此方に向かって黒っぽい猛禽が飛んできます。飛形はV字、でも背景が空だけ何もない空抜け状況、ファインダーを覗くと黄褐色…チュウヒか?? 何時もなら、空抜けでチュウヒだとしたら撮らない可能性が高い状況ですが、この日はカメラテストなので来るもの拒まず20枚ほどを連写しました。

近づいてきた猛禽は途中でUターンし遠ざかって行ったので、撮影時間は30秒ほどかと思えます。撮った写真を、カメラの液晶でチェックをすると、瞳に光の反射が入り、生き生きとした表情に撮れていて満足です。当然、カタシロワシとは全く分かっていませんし、写りに満足し鳥の識別については、チュウヒかなあ…程度で流してしまいました。

この時、観察台には他にも数名の方が撮影していました。私の連写音を聞いても空抜けの状況を見てか誰も撮ろうとしなかったようで、今回、一緒にいた方に確認しても、私がカメラテストをしていた事は良く覚えていたのですが、そんな鳥は記憶にないし、写真も撮ってないとのことでした。

帰宅後、撮影した200枚以上のRAWファイルをカメラからパソコンに取り込み、ディスプレイでチェックをして画像ファイル(JPEG)化しましたが、この時点でも新しい



カタシロワシ 2014. 11. 3 千歳市長都沼上空

カメラで気になることがあり再調整等に気を取られ、識別云々には気が回りませんでした。ただ、この写真の写りは満足だったので、私のブログの「カメラ記事」用の写真として掲載することとしましたがチュウヒとしてしまいました。

それから10ヶ月が過ぎた今年9月、こんな鳥を撮ったことさえ忘れていた時に、当会の樋口副会長を通じ、ブログに掲載されていた鳥が北海道大学農学院で鳥類研究をされている先崎理之さんにより「北海道では極めて希なカタシロワシ」と確認されたことと教えていただきました。

先崎さんによる識別ポイント次のとおりです。

- ・大きな嘴、短めの角尾、比較的広い翼幅からイヌワシ属の一種
- ・イヌワシ属のうち、全身黄褐色の種はソウゲンワシとカタシロワシ若鳥
- ・本個体は下大雨覆先端の淡色斑を欠くのでカタシロワシ若鳥
- ・少なくとも内側初列風切数枚が新羽なので、2または3暦年の個体。イヌワシ属以外ではオジロワシ若鳥も似ているが、当該個体は尾羽が一様に褐色で楔型でないことから異なる。

当然ですが、チュウヒの訳がありません。私も指摘を受け改めて、写真を見てみると、まず目に入ったのが外側初列風切の先端分離がなんと7枚です。これは「ワシ」と名のつくものの特徴であり、「タカ」はクマタカを除いて6枚以下だということも知っていましたが、こんな単純なことさえ見逃していたなんて…赤面の至りです。

今回の観察経過を記事にすると、自分の無知を晒すようなものですが、それでも貴重な記録とのことなので、恥ずかしながら正式に印刷物として公表し、記録として残しておくべきものと考えました。

私は学生時代から写真を趣味の一つとしており、主に山の風景やマクロレンズで昆虫などを撮っていましたが、10

年ほど前に偶然、千歳川で見たカワセミが撮りたくて、野鳥撮影を始めました。初めはカワセミ、ヤマセミに特化した撮影でしたが、フィールドにいる時間が増えるにつれ、他の野鳥との出会いも当然増え、その美しさ面白さに魅入られ色々な鳥を撮るようになりました。

私の写真に対するポリシーは「写真は綺麗でなくてはならない」ですが、そのために、撮影のための技術や知識の習得には力を入れてきましたが、鳥の識別や生態に関する知識については、おざなりにしていたのではと、反省させられる出来事でもありました。何たって、もう少しで貴重な記録を埋没させてしまうところでしたから…。

これからも様々な出会いを求め、カメラを持って自然の中に歩いていきます。そして、生態や識別など色々なことも学びたいと思います。

最後に、これまで国内で撮られたカタシロワシの写真をインターネットで調べてみましたが、今回の写真は、その中でもハッキリ明瞭に撮れていて、記録写真としては良い出来ではと思っていますが…写真の写りだけは自慢させてもらって良いですか？それと、この次はカタシロワシ成鳥に逢いたいものです。大丈夫です。今度は一目で識別できますから。

参考文献

- 小原秀雄・浦本昌紀・太田英利・松井正文編著 2000 レッド・データ・アニマルズ1 ユーラシア、北アメリカ。講談社。
- 真木広造・大西敏一 2000 日本の野鳥590. 平凡社。
- 五百沢日丸 2004 日本の鳥550 山野の鳥 増補改訂版。文一総合出版。
- 高野伸二 2007 フィールドガイド 日本の野鳥 増補改訂版。日本野鳥の会

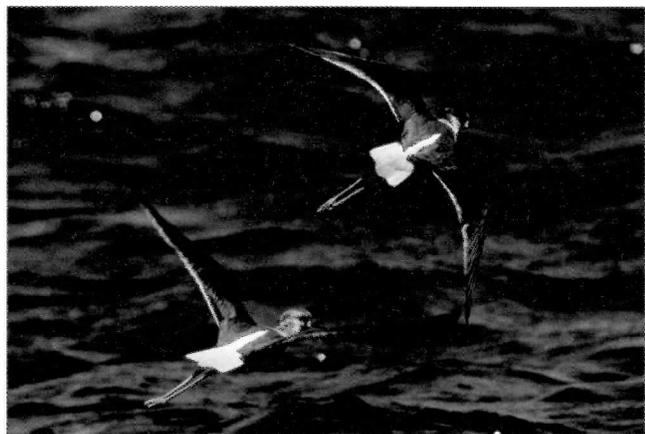
表紙の鳥

セイトカシギ

(カラー写真は<http://www.aigokai.org>に掲載)

シギと名がついても、セイトカシギ科のセイトカシギです。日本にはシギ科の仲間はたくさん記録されていますが、セイトカシギ科は、本種とソリハシセイトカシギの2種だけです。シギの識別は難しいと頭をかかえてしまいがちですが、本種については、特に細く尖った黒い嘴と桃色の細長い足が際だって目立つので識別も容易で、本種が希な鳥であるということも相まって出会えれば喜びもひとしおです。写真は、今年5月、礼文町香深字津軽町の海岸で休息する6羽を、一緒に行った本会の若い会員らと観察した時の一コマです。

富川 徹 (江別市)



コウノトリが石狩市聚富水田に長期滞在

千歳市 熊本 進 誠

コウノトリが私の職場近くの石狩川河口周辺に今夏1ヶ月余り滞在しました。初見は2015年7月27日午前7時40分に、石狩市厚田区聚富(しゅぶ)の知津狩(しらつかり)川沿いに広がる水田の中の道路から直ぐ脇の肉眼で確認できる20~30m離れた場所でした。以後同じ水田あるいは畦道で毎日観察できましたが、多人数の観察者が張り付き始めた8月23日から1週間後8月31日を最後に同地区から姿が見えなくなりました。

北海道でのコウノトリの記録はこれまでに十数例あり(*1)、今回の場所に比較的近い石狩市生振の石狩川沿いでは、1993年の5月から6月にかけて観察されています(*2)。最近では昨年2014年12月に根室市と苫小牧市で(*3)、そして今年2015年5月に浜頓別町ベニヤ原生花園で(*4)記録されています。

今回の飛来にあたり、道内の環境省の出先機関に確認を取って、担当者からの指示通り、情報が拡散しないように留意して観察を継続することにしました。苫小牧地区のコウノトリ観察経験のある自然保護指導員と連絡をとり助言を受けました。

写真は滞在まもなくの朝に水田の畔道で撮影されたものです。脚は赤色で嘴に赤味がありませんでした。大きさは周辺に多くいるアオサギより一回り以上大きく、採餌のため嘴を稲の横にもぐらせても上半身は稲穂の上に見えました。地上で特に太くて白い首はアオサギなどのサギ類と違って目立ちました。飛翔時にはほぼ同じ大きさのタンチョウと比べて大きな嘴と赤い脚が目立ちました。脚環はしていないのが確認できましたので放鳥された個体ではなく、飛翔時の羽に目立った欠損もないことから単独行動の若鳥のようです。活動場所は石狩市厚田区聚富の知津狩川左岸に広がる水田の中の500m以内に限られ、気に入って毎日同じ場所で採餌を続けていました。ねぐらに帰る以外はほとんど飛んで移動せずに、水田耕作者が近づいても100mくらいの距離を保つために少し歩いて移動するだけで、軽トラックがすぐ脇を通った時に飛び上がった以外はゆったりとした行動を続けていました。滞在期間中は日の出とともに同地区に現れ、日没直前にねぐらに引き上げる日課を繰り返していました。

コウノトリが長期間滞在した場合には、ねぐらは同じ場所に固定したところを使うということで聚富地区の林を日中にさがしたのですが、上部にコウノトリがねぐらとして使用できそうな高木が見つかりませんでした。そこで8月21日に地元の自然保護団体の方に協力してもらって夕方の飛翔経路を確認しました。国道231号線の私有地の東側の林付近と推定されましたが、具体的なねぐらの同定はでき



コウノトリ 2015. 7. 29 石狩市厚田区聚富
安田秀司さん(石狩市)撮影

ませんでした。

水田にいる大部分の時間は採餌に夢中でしかも採餌場所を変えずにいたのは、8月中はまだ水田の水位は高く、蛙などの両生類の餌も豊富だったこともあるでしょう。8月末になると水位が低くなり、畦道から用水路に入って採餌するようになりました。日中は採餌に夢中で人が近づいてもゆっくり遠ざかるだけで100m以上離れていれば、採餌中はもちろん、毛繕い中でも観察者を意識している素振りもみせませんでした。観察は適当な距離を保ち短時間にとどめるようにしていました。しかし、8月23日以後多数の観察者が朝から夕方までべったり張り付くようになった頃と水田の水位が低下して餌がとりにくくなった時期が一致して、31日の朝から姿が見えなくなりました。

滞在前にも滞在后にも目撃情報が入って来ていないのでどこからやって来てどこへ行ったかは不明なのですが、渡りの季節でもない最も暑い1ヶ月間をほとんど移動せずにこの地で過ごしたのは、大型の飛翔航続距離が大きなコウノトリからして、餌が豊富な水田と水路が広がり、河岸段丘と林が囲むこの聚富地区の水田環境が気に入ったからと考えたいです。蛇足になりますが2年前頃から春の渡りの季節に石狩市厚田区聚富地区のこの水田に数百羽以上のコウノトリとガン類が採餌に訪れるようになってきたことを付け加えておきます。

参考文献

- *1 藤巻裕蔵. 2012. 北海道鳥類目録 改訂4版. 極東鳥類研究会.
- *2 泉 勝統・新城 久. 1994. 石狩川水系 生振・茨戸川流域の野鳥 (2). 北海道野鳥だより95: 8-10.
- *3 北海道野鳥愛護会広報部. 2015. コウノトリの記録—12月に苫小牧市(ウトナイ湖)、根室市—. 北海道野鳥だより179: 12-13.
- *4 北海道新聞朝刊地方版(留萌・宗谷). 2015年5月10日.

ツツドリはだまし上手？ アオジはだまされ上手？

森林総合研究所北海道支所 川路 則友

カッコウの仲間が、自分で巣を作らず、他人（鳥）の巣に卵を産み込んで育ててもらおうという習性（托卵）をもつことは、皆さん、よくご存じのことと思います。日本で繁殖するカッコウ類はカッコウ、ツツドリ、ホトトギスおよびジュウイチの4種ですが、彼らは卵を産み付ける相手（宿主）の鳥との間で長い間の確執があり、相手をうまくだまして自分の子として育てさせるために、いろいろ努力（？）をしてきたと言われます。その一つは、卵の色です。通常、宿主の卵の色や模様によく似た卵を産み込むと、宿主もそれにだまされるのか、ほとんど疑わずに卵を抱き、ふ化させます。さらには宿主のヒナとは似ても似つかない巨大な物体に成長したヒナを仮親がけなげに育てる様子は、何とも言えない悲壮感を漂わせます。しかし、カッコウ類もそうしなければ、種を存続させることができなかつたことを思うと、いちがいに悪者扱いをするのも可哀想で、何とも生物界の不可思議さを感じざるを得ません。宿主の方も、ただだまされるだけでなく、徐々に托卵を見破るようになることで、お互いの競争は果てしなく続いていると思われまふ。

本誌172号（平成25年6月発行）に、森さやかさんが、もともと白っぽい卵を産むセンダイムシクイの巣にツツドリが赤い卵を産み付け、無事に巣立たせることができた、という帯広市での観察結果を書いておられます。そこには、本州以南でウグイスに似せた赤い卵を産むホトトギスがほとんど生息していない北海道中部以北、以東では、ツツドリがウグイスへの托卵を成功させるために卵の色を赤い色に変化させてきたのではないかと推察されています。本州以南では、ツツドリはおもに托卵の相手としてセンダイムシクイを選んでおり、巣には宿主に似せた白っぽい卵を産むこともよく知られています。私は、札幌市羊ヶ丘にある森林総合研究所北海道支所の落葉広葉樹林内で森林性鳥類、とくに地上や林床部に巣を作る鳥の繁殖生態をおもに研究していますが、これまで、同じく白い卵を産むメジロや薄い赤白色の地に小さな斑点のある卵を産むヤブサメの巣にも、ツツドリが赤い卵を産み込むのを観察しました。そのときは、複数の白っぽい宿主の卵にぼつんと混じる大きく真っ赤な卵という異様な光景に驚いたものです。ところが、昨年の繁殖期に調査地内で見つけたアオジの巣に、やはりアオジ本来の卵色とはまったく異なる赤い卵がぼつんと1個産みこまれ、それを仮親のアオジがしっかりと抱いてヒナをふ化させ、さらにはしっかり餌まで食べさせて、ついには立派に巣立たせたのを観察しました。以下に、その状況を簡単にお話しします。

托卵されたアオジの巣は、チシマザサの上部にヤマブドウのツルが絡まることで小さな茂みになった部分に細いササの茎や鞘、落葉などを組み込んで作られていました。これは調査地内でごく普通に見られるアオジの巣とほとんど変わりありません。ただ、まさに林道のすぐ脇に生えたササの上にかけてあるので、少し意識して見ると、簡単に見つかると思われ、捕食者もしくは林道を通行する人に壊されるのではないかと心配しました。巣を見つけたのは2014年6月22日でしたが、そのときは巣の中には何も入っていませんでした。ただ、周りでさかんにアオジのつがいが警戒して飛び回っていたので、まだ巣づくりの最中と思い、すみやかにその場を離れました。それから3日後の6月25日にそこを通りかかったものの、アオジの警戒する声などは一切聞こえなかつたので、巣の中を覗いてみたところ、



写真1 アオジの巣にぼつんと1個だけ産み込まれた赤い卵

なんと赤い卵が1個だけぼつんと産み込まれていました（写真1）。さらに2日後の6月27日に、またそこを通りかかったところ、巣の中からアオジと思える鳥がこそこそと出ていくのを横目で感じました。驚くべきことに、この赤い卵をアオジが抱卵していたのです。もともとアオジは淡い赤白色の地に紫色の斑が混じる、今回のような赤い卵とは似ても似つかぬ卵を産みます。しかも、そのときも巣の中には赤い卵が1個あるだけでした。

その後、細心の注意を払いながら、ときどき巣の中を確認することにしました。すると、7月8日早朝に、巣の中でヒナがふ化しているのを確認しました。そのヒナは、見慣れた小さな裸のアオジのヒナとは違って、ちょっと横幅のあるやや大きなカッコウ類のヒナでした。ヒナの口の中は鮮やかなオレンジ色で、口の横縁にはっきりした黒色の斑があること、上あごの両側にも黒色の斑があることか

ら、これはツツドリのヒナであることがわかりました。

巣が林道のすぐ脇にあることもあり、仮親が神経質になっていることから、長時間の直接観察はやめ、巣から3mほど離れた位置にビデオカメラを設置し、ときどき巣を撮影することにしました。すると、ツツドリのヒナには仮親であるアオジがオス、メスともに頻繁にやってきて、せっせと給餌しているのがしっかり写っていました。また餌としては、チョウヤガの幼虫と思われる、いわゆるイモムシ類を多く持ってきていました。ふ化後10日目には、ヒナの体が巣の中いっぱいになり、14日目には巣からはみ出しそうになっていました。また17日目には風切羽を伸ばして巣の外の縁まで出ていく行動を示すようになり(写真2)、18日目の7月25日朝7時過ぎにいきなり巣を出て、隣のササの枝に飛び移り、その後は次々ササを移動していつまいました。無事巣立ちです。

ツツドリのヒナがふ化後何日目で巣立つかについては、これまでほとんどデータがありません。わずかに長野県でメボソムシクイに托卵した例では、ふ化後17日目で巣立ったと報告されています。また昨年、私がこの調査地でセンダイムシクイへの托卵を観察した例でもふ化したヒナは17日目で巣立っています。しかし、1996年にメジロの巣に托卵したツツドリのヒナを観察したときは、ヒナが成長するにともない、その重さのせいか早めに宿主の小さな巣が壊れてしまい、推定でふ化後約13~14日目で巣を離れてしまいました。今回のアオジの巣で育ったツツドリのヒナは、18日目で巣立っていますので、だいたい他の例と同じように標準的な成長度合いを示していたと思われ、仮親のアオジがツツドリのヒナをじゅうぶん成長させることのできるような餌量を供給できていたと思われそうです。逆にこのヒナはがっちりした巣の中で、のんびりと1日余計にとどまっていたのかもしれませんが。

今回の観察で、興味深いことが2つあります。まず、ア



写真2 巣立ち前のツツドリのヒナ(ふ化後17日目)

オジが自分の卵色とは異なる赤い卵を疑問も持たずに(?)抱卵、育雛ののち巣立たせたということ、さらには、ほかにはアオジ自身の卵がまったくなく、ツツドリの卵1個だけをアオジがしっかり育てたということです。通常、ある鳥の巣が托卵される場合、宿主の巣には、すでに卵がいくつか入っていて、ツツドリはそれらの1つを食べるか、持ち去って、その代わりに数合わせ(?)のようにして1個を産み付ける、というのがよく見られるパターンです。もし何もない巣にツツドリが最初に宿主のものとかかなり異なる卵を産み込むとしたら、宿主は自分が産んだ覚えもない卵を警戒して、その卵を巣から放り出すか、巣自体を放棄する、などの行動をとると思われそうです。アオジは通常、4~5個の卵を産みます。今回の状況について勝手な推測をしてみると、まずアオジが数個の卵を産み、まさに抱卵に入ろうとしたときに、ツツドリがアオジの卵をすべて持ち去ったということが、まず考えられます。そのときちょうど私が巣を発見したのでしょうか。その後、3日間の間にツツドリが卵を産み込みましたが、すでに体の生理状態が抱卵体制に入っていたアオジは、それを放棄することもなく、さらに、そのあとに自分の卵を産み足すこともなく、「つい抱卵してしまった」と考えられます。もしそうだとすれば、ここにだまされ上手(?)のアオジの哀れな性格が如実に表れているようです。

カッコウの例では、自分が産み込む宿主はだいたい決まっているという報告があり、その宿主に合わせて個別に卵の色、模様を長い時間をかけて獲得してきたようです。ということは、赤い卵だけを産む羊ヶ丘のツツドリは、もともと他の場所でウグイスに托卵するために自分の卵の色を進化させてきた系統と思われそうです。しかし実は羊ヶ丘にはウグイスがあまりいないので、しかたなく他の鳥にも托卵したところ、意外にも排除されることなく、いくつかの種で受け入れられたということが考えられます。羊ヶ丘のセンダイムシクイ、メジロ、ヤブサメさらにはアオジまでなんと人(鳥)のよいことか、と感心させられます。この現象がいつころから見られているのかまったくわかりませんが、托卵される宿主の方でもやられる一方ではなく、これから対抗手段を進化させることが十分考えられるので、いつまでこのようなツツドリにとって天国のような状況が続くのか、将来が楽しみです。

以上の内容について、短報としてまとめて山階鳥類学雑誌に投稿したところ、査読者からも貴重な事例として評価をいただき、3月発行の号に掲載されました(*)。詳しくは、そちらもお読みいただければと思います。

*川路則友・川路仁子. 2015. 北海道西部におけるツツドリ *Cuculus optatus*によるアオジ *Emberiza spodocephala* 巢への赤褐色卵托卵例. 山階鳥類学雑誌 46:119-126

シルバ通信⑧

野鳥も住める都市とは？

北海道大学農学院森林生態系管理学研究室 島 崎 敦

読者みなさんの多くが山野や海岸などにでかけ、バードウォッチングを楽しまれていることと思います。また、家の近くのちょっとした公園や庭を訪れる身近な鳥たちの観察を日課にされている方も多くと思います。ただ、山から離れたところでは野鳥の種数・個体数が減ってしまうため、身近な野鳥を観察することはなかなか難しいかもしれません。しかし、もし都市の真ん中においても多くの野鳥を観察できるとすれば、とても素敵なことではないかと思えます。多くの野鳥も住める都市の条件とは、果たしてなんでしょうか？

1つ目の条件は、樹木や餌の量が十分である公園などの生息地があることです。また、野鳥は餌が不足した時や競争相手がいる場合などに、新たな生息地を求めて周囲に移動します。そのため、2つ目の条件として、都市の内部にも彼らが到達できるように、生息地以外の場所であっても、移動しやすいことが重要です。生息地と移動場所はともに重要です。しかし、野鳥にとって移動しやすい都市環境とはどのようなものなのかについてはあまり調べられたことがありません。そこで、都市でも目にする多くのシジウカラ科とゴジウカラ科の鳥類(以下カラ類)を対象とした研究を行ったので、ご紹介します。

準備として、札幌近郊の住宅地や公園、河川などに短辺30m、長辺50mの長方形の調査地をいくつも設置しました。その一例が図1です。図1は住宅地にある調査地で全体のうち「建物」が約25%、「樹木」が約15%を占めてい

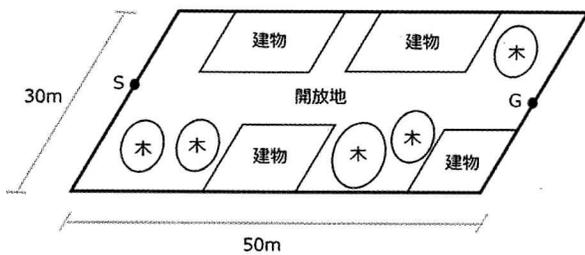


図1 実験の調査地例

て、残り60%が駐車場、広い道路などの何もないところ、「開放地」です。このように、都市において野鳥の移動に影響を与えそうな要素である「建物」、「樹木」、「開放地」、「水面」などが、それぞれの調査地で異なる割合で含まれるようにしました。「開放地」は舗装と草地に分けようかと考えたのですが、結果はほぼ同じだったのでまとめてあります。この調査地に図1のようにスタート(S)地点とゴール(G)地点を定めました。準備をしたら、いざ実験

です。S地点でモビングコールという野鳥をおびき寄せる効果のある音声を再生し(写真1)、集まった野鳥を記録しました。S地点での再生を止め、続けてG地点でモビングコールを再生しました。そして、S地点に集めた野鳥のどれだけがG地点まで飛んでくるか観察しました。



写真1 携帯電話から流れるモビングコールに集まるシジウカラ(上向き矢印)とヒガラ(下向き矢印)

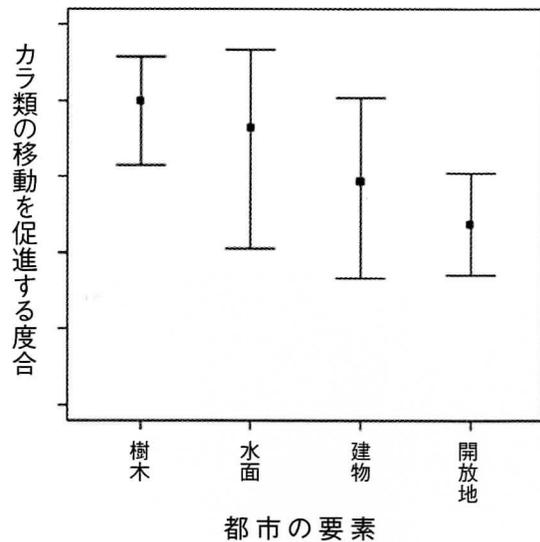


図2 モビングコール実験の結果。縦軸は上に行くほどカラ類の移動を促進する要素であることを示す。点は予測値の中央値、上下横棒は95%信頼区間を示している。

この各調査地でS地点に何羽集まり、Gまで何羽移動したかというデータのうち、カラ類のデータだけを使って統計解析を行いました。カラ類の移動に、「建物」、「樹木」、「開放地」、「水面」といった要素の量がどのように影響す

るか推定しました(図2)。この結果を見ると、樹木がある場所は移動しやすいものの、開放地が多い場所では移動しにくいことがわかります。これは樹木があるという、カラ類にとってなじみ深い環境ほど、気兼ねなく移動すると解釈できるでしょう。また、建物は樹木と開放地の間程度の効果があるようです。理由ははっきりとはわかりませんが、外敵から身を隠す効果などがあるのかもしれませんが。水面のある場所はかなり移動しやすいという結果になりましたが、これは野鳥にとって、河川は道路などと比べて横切りにくいとするカナダでの研究と反対の結果となっていました。この点はさらなる調査が必要かもしれません。

実験から、都市に広く存在している、建物が立ち並んだ場所は、駐車場や広い道路などの何もないような場所と比べれば、意外にも野鳥にとってはある程度移動しやすいこ

とがわかりました。野鳥は他の動物と違い、翼をもっているため、住宅地などの人工的な環境もそんなに障害にならないでしょう。また、そういった場所で樹木を増やすとさらに野鳥の移動を促進できることもわかりました。街路樹や庭木は、スペースをとってしまうことや、落葉落枝などを嫌って積極的に植えられないことも多くあります。しかし、人々に四季を感じさせ、心を潤すほかにも、野鳥たちのためにもなるのであれば、個人的には街路樹がもっと増えても良いのではないかと考えます。近年、全国的に起こっている人口の減少に伴い、政府により都市中心部に都市機能を集中させる「コンパクトシティ」が提唱されています。今後、再開発が行われる都市は少なからずあるでしょう。そういった際に生息地や移動場所として、都市の街路樹や樹林地の配置も併せて考えていくことが重要なのではないかと思います。

石川啄木の千鳥と蟹

北海道野鳥愛護会会長 小堀 煌 治

9月の下旬、分厚い封筒が届いた。開封すると、何と石川啄木に関する同人誌や本のコピー。何かの間違いかと思ったが、差出人を確認して思い出した。前月、文化センターのロビーで会社の後輩にばったり会った。彼は「人間石川啄木入門編」を受講しているという。金銭的にルーズだったと言われる啄木を、現役時代は経理マンで超まじめ人間、その彼が興味を持つとは意外だった。いたずら心が起き、少しからかってやろうと思い、うろ覚えだが啄木の歌で「氷かがやく釧路の冬の海で千鳥がなく」という歌には疑問がある、冬の釧路の海で千鳥が鳴くのは変だ。もう一つ、これもうろ覚えだが「白砂に泣きぬれて 蟹とたわむる」これもおかしい。たわむれるのはタラバガニやケガニのように大きく立派なカニではなく、小さなイソガニあたりがふさわしいと思うのが、イソガニであれば磯の岩場にて、砂浜にはいないはず。こんな屁理屈を付けて難題をふっかけた。まじめな彼は考え込んでしまった。こちらはニヤニヤしてその場は別れたのだが、彼は私の愚問を講師の先生に質問してくれ、先生もまともに受け止めて資料を集めてくれたのだ。

すっかり恐縮してしまったのだが、コピーを読んで驚いた。意外にもこの愚問が歌壇でもかなりの論争になっていたのだ。その中になつかしいお二人の名前を発見した。愛護会の大先輩、斎藤春雄氏と佐々木勇氏。お二人は野鳥研究の大御所。会の設立にも尽力された方だ。斎藤氏は愛護会の副会長として活躍していただいた。斎藤氏の父の斎藤春治氏は絶滅したと思われていたタンチョウが大正12年に釧路湿原で発見されたことを専門誌「鳥」に報告し、当時は大きな話題になったようだ。佐々木氏は愛護会の設立当時の監事。小樽の愛護会会員をまとめていただき、冬の小

樽で船からの観察会なども企画していただき大変世話になった方である。お二人の千鳥の歌に対する見解がこの資料に見つかり他の歌人も野鳥の専門家の意見として参考に行っている、概略紹介したい。

「しらしらと氷かがやく千鳥なく

釧路の海の冬の月かな」

斎藤氏は北海道新聞の「北の鳥」でこの歌を引いて「これはウミスズメであろう、釧路の冬に千鳥は居ないからである」と書いている。佐々木氏はもっと詳しく、北海タイムスで「千鳥は渡り鳥で、小千鳥、白千鳥、いかる千鳥、目大千鳥など二十以上の種類^(*)があり、春三月から四月初めにかけて南方から渡って来て本道に短期日羽を休め、間もなくベーリング海、シベリヤ等、北方に繁殖の為渡って行く。秋八月から九月になると再び北方から本道に渡って来て羽を休めた後南に帰る。また千鳥は沼や河や海邊で暮し魚類をとって、えさにするのであるから、雪の多い本道特に寒さの烈しい釧路に棲息しているとは考えられない」と書き、「しかし詩歌の世界ではもろもろの鳥という意味で千鳥という字を使うので、この意味でつかったのなら問題は無いが、冬の海でなく鳥は海かも、海ねこ、等でこれではものさびしい冬の海の実感が出ないからこの千鳥はどうしても学問上の千鳥でなくてはならない」としている。

このことに関して、当地の釧路でも小論争があり、鳥居省三氏は著書の中で「釧路の郷土史研究家は『釧路の二月に千鳥は来ない』と言っている、従って啄木のこの歌はその観察に誤りがある」としている。一方「啄木の研究家は『歌というものは一つの感動で詠むのであって、それが科学的な観察に基づくか否かは、第二義的であり啄木がゴメを間違えて「千鳥」と詠んだとしても状況からいえば感動的

に啄木がそう信じたのだから、いいではないか』と反論している」と二人の意見を紹介し、鳥居氏自身はある鳥類研究家に訊いてみたところ、「いわゆる“千鳥”と呼ばれている“かもめ”の種類には、五月から六月にかけて釧路の海岸に寄るものもあるが一月、二月の厳冬に来ることはない」と言われた。従って科学的には啄木は何らかの鳥を間違えて千鳥と見た事は間違いない、と述べている。

「啄木全集＝岩波書店」のあとがきでは斎藤三郎氏が「ある人は釧路湾に千鳥が居ないという理由の下に『詩人のウソ吐きめ』と責めている。なる程現在は居ないかもしれぬが当時たしかに棲息していたことは同じ頃出版された文献にチャンと記載されている。この一例をみるまでもなく啄木の歌には殆どウソが無い」と啄木を擁護している。

さてもう一つの

「東海の小島の磯の白砂に

われ泣きぬれて蟹とたはむる」

だが、冊子「函館—青森」で桜井健治氏は“東海の小島の磯が曲者”、場所の同定には諸説粉粉。函館の大森浜が有力な候補地なのだが、さてこの浜に蟹がいるのかどうか、次のような論争があるとし、A氏は「函館に住んだことがあるが大森浜には蟹がいない」。B氏は「私は大森浜のワタリガニを目にし食べてもきた。甲幅15センチ程の蟹、浅海、特に河口に近い砂底に棲息し主に夜間に活動する。あの浜に蟹は居る。手づかみする事も戯れることもできる」と反論している、と両論を紹介している。

今年の愛護会の石狩河口探鳥会で砂浜にワタリガニの死

がいを見つけた。数年前に石狩川にクロツラヘラサギ2羽が飛来した時、河口で蟹を食べているのを見たことがある。あれがワタリガニだったのか、モクズガニだったのか。砂浜にも蟹が居るのは分かったのだが、果たして15センチもの大きな蟹とたわむれるものだろうか。啄木が生物にどれ程の関心を持っていたのかは分からない。

歌人の中には事実を徹底的に追及した人もいたようだ。作家の北杜夫著「どくとるマンボウ昆虫記」によると父の歌人斎藤茂吉は松尾芭蕉の「しづかさや岩にしみ入る蟬のこゑ」の蟬の種類を「この蟬は油蟬だろう」と書いたが、ある人から、「芭蕉が出羽立石寺に行ったのは7月はじめ、まだアブラゼミは鳴かない季節だ」と反論された。茂吉は論戦となると絶対に後ろを見せぬ男。この季節7月に2度に渡り立石寺を調査のため訪れたが2度目に訪れた時にも雨、ニイニゼミかアブラゼミかの確証を得ることが出来なかった。地元の人によく確認するよう頼んで帰ってきた。その8月に山形に行った時、立石寺の蟬の標本がずらりと並べられていた。大部分はニイニゼミ、アブラゼミもあったが、茂吉はあっさりカブトをぬぎ、「動物学的には油蟬を絶対に否定できないが文学的にはまず油蟬を否定していい」と記した。北杜夫は「俺と戦うものはかならず死ぬ」などとわめき、そのとおり相手を面罵し、うちのめした茂吉にしてはこれははなはだ稀有なことである、と書いている。

※注 日本鳥類目録改訂第7版の種類数とは異なるが、当時の新聞記事をそのまま引用する。

福移探鳥会におけるウグイスの記録の不思議

札幌市北区 樋口孝城

今年2015年6月28日に行われた北海道野鳥愛護会の福移探鳥会で久々にマキノセンニュウが記録されました。これを機会に福移のマキノセンニュウの過去の状況を調べているうちに、面白いことに気づきました。

次ページの表は、毎年1回、大体7月初めに行われている福移探鳥会記録のうち、主な草原性鳥類についてのものです。当探鳥会は1974年から行われているのですが、スペースの関係で1986年から2015年までの30年間にしています。どういうわけか1993年の記録が残されていないので、実際には29年分になります。

福移は札幌市の北端部近くに位置し、探鳥会参加者は石狩川左岸堤防道路上を歩きながら、河川敷や外側の畑地の鳥を見ます。堤防法面などは牧草地として利用されていますが、自然に近い草原や、かなり大きな河畔林があるので、草原性の鳥の他に、林縁部を好む鳥や、河畔林を移動中継地として利用する鳥も見られます。探鳥会が行われる時期は夏鳥の繁殖後期にあたり、鳥たちのさえずりがまだ



ウグイス (写真提供 道川富美子さん)

賑やかです。

さて、ウグイスの記録に注目して下さい。2003年までの記録は全くありません。表に載せていない1974～1985年に

福移探鳥会 草原性鳥類の記録 (1986~2015)

科名	種名	86	87	88	89	90	91	92	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15
キジ科	ウズラ	○	○	○	○	○	○	○		○				○	○	○		○												
カッコウ科	カッコウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
モズ科	モズ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	アカモズ		○	○	○	○	○	○	○															○	○					
ヒバリ科	ヒバリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ウグイス科	ウグイス																		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
センニュウ科	マキノセンニュウ					○	○	○		○		○	○	○		○														○
	シマセンニュウ	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	エゾセンニュウ			○	○	○	○	○		○		○		○		○		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
ヨシキリ科	オオヨシキリ	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	コヨシキリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヒタキ科	ノゴマ	○	○		○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○				○
	ノビタキ	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
アトリ科	カワラヒワ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ベニマシコ	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ホオジロ科	ホオアカ	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	シマアオジ	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○		○														○
	アオジ	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	オオジュリン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

もやはりありません(参照:私たちの探鳥会 探鳥会30年の記録、北海道野鳥愛護会、2001)。ところが、2004年から記録されるようになり、その後は2008年を除いて、ずっと記録が続いています。

ウズラ、アカモズ、シマアオジの記録はここ10年以上も得られていません。マキノセンニュウもやはり記録されずにいましたが、2015年には久しぶりに、しかも複数個体と思われる声が聞かれました。シマアオジはもはや絶望的なことは言うまでもないことですが、ウズラとアカモズ、そして、今年記録されたとはいえ、マキノセンニュウについても先行きが心配されています。これは福移に限ったことではなく、ほぼ全道的な状況です。

ところがウグイスは記録有無の推移だけを見ると上述の鳥たちとは反対です。いなくなったのではなく、いるようになったのです。探鳥会ではたくさんの目があります。たくさんの耳があります。それにもかかわらず2003年まで記録がなかったということは、そもそも全くいなかったと断言しても過言ではないという気持ちです。そして、ある時から突然のように記録され始めました。どうしてでしょうか。カワウやミヤマガラスのように、ある時から北海道に飛来するようになった鳥とは違いますから、どこかから、多分そんなに遠くないところから移動してきたに違いありません。

1974年の探鳥会開始から実に30年目にして初めてウグイスが記録されました。その時に限れば、これはおそらく「事件」です。その記念すべき?2004年の探鳥会に実は私

も参加していました。野鳥だより第137号に掲載されている参加者名簿には、今も活躍中の何人もの馴染みの方々の名があります。10年ちょっと前のことではありますが、当時、少しでも話題になったという記憶はどなたにも全くないようです。

こここのところの記録はだいたい河畔林方面からの声によるものみです。ウグイスはやぶの鳥です。河畔林と堤防法面牧草地が接する林縁部にはやぶがあります。おそらくそのあたりに生息し、繁殖も行っていると思われます。2004年から記録があるということは、その年か、あるいはそのちょっと前の年からやぶが形成されるなどの林床植生の変化が起り、ウグイスが入り込んで来た可能性があります。林が再生されつつある台風被害の跡地には、よく茂ったやぶができることが多いので、平成16年の台風16号による河畔林の風倒を考えてみましたが、それは2004年でも9月のことでしたから、誘致要因?からは省かれそうです。河川敷牧草地造成のための河畔林伐採により、やぶが増えたことも考えられますが、これはあくまで想像です。ともかくも何かが起こったのでしようが、今となってはもうわからないというのが実際です。

ウグイスが姿を見せて鳴くと、探鳥会参加者は大喜びします。でも、声だけだと、「ウグイス声」の一言で済まされてしまうことが普通みたいです。スズメとはまた違った意味での「普通の鳥」という存在でもあります。でも、その普通さに十分な注意を払わなければならないのかもしれない。



野幌森林公園

2015. 6. 21

【記録された鳥】 オシドリ、マガモ、カイツブリ、キジバト、ツツドリ、トビ、カワセミ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ、ニュウナイスズメ、アオジ 以上22種

【参加者】 秋山洋子、池田淳子、井上公雄、大表順子、小倉史恵、笠井好美、金子喜映・洋子、川村宣子、栗林宏三、黒河内 誠、後藤義民、小西美美枝、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、高橋きよ子、高橋利道、竹内強、立田節子、田中さちよ、辻 雅司、辻田捷紀、戸津高保、中正憲佑、西尾京子、野村 巖、橋本繁樹・博美、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城・陽子、菱谷紀久子、福島敏和・静、船戸一典、辺見敦子、松原寛直・敏子、本杉政司・朋子、安井静子、山本育子、横山加奈子、吉田慶子

以上47名

【担当幹事】 品川睦生、竹内 強

福 移

2015. 6. 28

札幌市東区 小倉 史恵

6月28日、福移での探鳥会に参加しました。石狩川堤防は、溢れる鳥たちの声と植物をサラサラ揺らす風の音が心地よい草原でした。初心者にとって、初めての草原探鳥でしたが、以前から会えることを楽しみにしていたノビタキを思う存分に見ることができて、とても感激！です。白シャツに黒のスーツを纏い、小洒落たオレンジ色のタイを着けたノビタキは、やっぱりかわいい紳士でした。

他にも、ミルクティーみたいな色をした柔らかな印象のシマセンニュウ、爽やかな玉露色のアオジ、カッコウは思いのほか大きくて、チゴハヤブサの胸の斑点は、めだか模様の水コップのように美しい・・・などなど、鳥たちの、想像以上に鮮やかで愛らしい姿に私は驚きと喜びでいっぱいになりました。なにより、種は違えども同じ時代の同じ場所に生きる仲間として存在している、この幸福に感謝！そして図鑑では知り尽くせない、生き活きとした鳥たちの表情や行動の一つ一つが、新鮮な発見でした。

この楽しさを教えて下さった北海道野鳥愛護会の皆様にも深く感謝しつつ、鳥たちの生活を少しだけ覗かせていただく気持ちで、これからも野鳥観察を続けてゆきたいと思っています。

【記録された鳥】 キジバト、カワウ、アオサギ、カッコウ、イソシギ、トビ、カワセミ、アカゲラ、チゴハヤブ

サ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ウグイス、マキノセンニュウ、シマセンニュウ、エゾセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ムクドリ、コムクドリ、ノゴマ、ノビタキ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン 以上32種

【参加者】 秋山洋子、五十嵐優幸、井上公雄、小倉史恵、金子喜映・洋子、川東保憲・知子、栗林宏三、小林弘輝、小林尚美、小林正彦、齊藤由美子・佑朱、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、新城 久、高橋きよ子、高橋宣子、田中さちよ、辻 雅司、戸津高保、中正憲佑・弘子、西尾京子、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城、広木朋子、本間康裕、本杉政司・朋子、山本康裕、横山加奈子

以上36名

【担当幹事】 辻 雅司、横山加奈子

野幌森林公園

2015. 7. 12

【記録された鳥】 オシドリ、マガモ、カイツブリ、キジバト、アオバト、アオサギ、ツツドリ、トビ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ、イカル、アオジ 以上28種

【参加者】 今村三枝子、金子喜映、川村宣子、栗林宏三、後藤義民、齊藤由美子・佑朱、品川睦生、島崎康広、島田芳郎・陽子、清水朋子、田中さちよ、富川 徹、長尾由美子、畑 正輔、早坂泰夫、辺見敦子、牧 茂、松原寛直・敏子、本杉政司・朋子、山室ゆかり、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子

以上27名

【担当幹事】 後藤義民、清水朋子

石狩川河口

2015. 8. 23

東京都三鷹市 鈴木 虹布 (11歳)

私は水辺でのバードウォッチングははじめてだったので、どんな鳥に会えるのか、とてもワクワクしていました。

最初に浜にいたのは、トウネンでした。3羽の幼鳥は波打ちぎわで、何かを食べていました。しばらく観察していると、見た目の違いだけでなく、一羽一羽に個性を感じることが出来ました。波が来る前に逃げる子、ギリギリまで来ると急ぎ足で逃げる子、波が足にかかってから慌てて飛んで逃げる子...

3羽のトウネンは、私たちの道案内をしてくれるように移動しながら、すぐ目の前で過ごしていました。渡りの前のわずかな時間だけれど、一緒に過ごせたことに感動しました。

しばらく歩くと、オジロワシがさん橋にとまっているの

が見えました。野生のは、はじめて見ました。動物園のとは、カンロクが違うと思いました。同じさん橋には、ウミウ、アオサギ、シロカモメなどもありましたが、オジロワシとは少し距離をとっていたのが、おかしかったです。

河辺を歩いていると、白い大きな鳥が飛んでいました。私はカモメだと思い何も言いませんでした。そうしたら、誰かが「なんだろう？大きいね」と言うのが聞こえたので、双眼鏡で見てみました。「ペリカンだ!!」と言う人がいたので改めてよく見ると、確かに少しピンクっぽい羽です。着地した所を望遠鏡で見せてもらおうと、ペリカンでした。モモイロペリカンは、今日の日玉でした。調べてみると、11年前に山口県の動物園から逃げてきた個体がいるようですが、その個体と同じかどうかは分かりません。その後は、ノビタキなど草むらの鳥たちを見ることが出来ました。

とても楽しい探鳥会でしたが、チドリを見られなかったのが少し残念です。“千鳥歩き”がどんなものか見たかったなあ。次回の楽しみにします。

今日、見られた鳥は17種類！水辺の鳥の世界を楽しめて良かったです。ありがとうございました。

【記録された鳥】アオバト、ウミウ、アオサギ、ダイサギ、アオアシシギ、トウネン、オオセグロカモメ、ミサゴ、トビ、オジロワシ、ハシボソガラス、ヒバリ、ノビタキ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオアカ 以上16種

※モモイロペリカンは、その後の新聞報道で、ノースサファリサッポロ（札幌市南区）から逃げ出した個体であることが判明しました。

【参加者】青山明彦・みどり、上坂 久・千幸、内山英晋、大内和憲、金子喜映・洋子、小林弘輝、小林尚美、小堀煌治、小谷内久江、漆崎 修、品川陸生、島田芳郎・陽子、白澤昌彦、鈴木恵子、鈴木龍太郎・リオ・虹布（コウ）・泉十（ミツ）、高田征男、高橋きよ子、高橋貞夫、高橋良直、竹田芳範、立田節子、田中さちよ、徳田恵美、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、中山裕子、西尾京子、畠中秀昭、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城・陽子、菱谷紀久子、舟本和子、本間康裕、松原寛直・敏子、本杉政司・朋子、吉田慶子 以上50名

【担当幹事】島田芳郎、原 美保

鶴川河口

2015. 8. 30

沙流郡日高町 鈴木 伸子

今回は春に続いて2回目の参加でした。野鳥観察を始めて2年で、ガイドブックをながめている割には鳥の名前を覚えられないでいます。

曇り空で少し寒いくらいの中、集合場所の「四季の館」から歩いて現地に向かいました。この日最初の方に見られたのはマガモ数羽、その後鳥の群れが何かやって来ました。私には何の鳥かわかりませんでした、ムクドリとの

ことでした。それから次には、「オオジシギ」という声もありましたが、鳥合わせの時は出ませんでした。他の似た鳥かもしれず、断定できなかったそうです。

その付近の水路にかかる橋を歩いている時、一度「カワセミ」を見たいものだと話していたら、なんとカワセミが水辺の草地から出て来て、ホバリングを始めたのです！しかも、結構長い時間。何か探していたのか、水中に潜った後、すぐまた草地の方に行ってしまいました。突然の光景にデジカメにも思いが行かず見とれていました。

さらにあちこち鳥探しをしながら先へ進むと、ダイサギ、アオサギ等何種類も見られました。参加者が多いと見つけ易くて良いですね。

後半、砂浜に珍しい鳥がいました。「クロトウゾクカモメ」が1羽休むようにして。海岸までやって来ることは稀のようで、皆さん一斉にスコープやカメラをセットし、しばし観察です。珍しいのでだんだん欲が出て、少しずつ近くに移動しましたが、逃げたりしないので、悠然としているのか、体調が悪いのか？元気で戻って行ってほしいと思いました。なお、この「クロトウゾクカモメ」は、鳥合わせが終わってからのことですが、写真による検討で、「シロハラトウゾクカモメ」ということになったそうです。

最終の場所まで行くと、カモの一群が一斉に飛び立ち、近づき過ぎるのは鳥にとっては恐怖だったと改めて思いました。こちらが勝手に会いに行くのだから、常に気を付けていないとならないですね。

この日飛んでいたのは、ダイサギ、カモ、ウミウなどですが、地面に降りてからの様子も見たいと思いました。

今回の目的のシギ・チドリは見かけませんでしたが、この時期秋の草花も多く見られ、鳥と合わせていい観察会でした。次回はもっと鳥の事を覚えて、また参加したいと思います。



シロハラトウゾクカモメ 2015.8.30 撮影 高橋良直さん

【記録された鳥】 マガモ、カルガモ、コガモ、カイツブリ、キジバト、カワウ、ウミウ、アオサギ、ダイサギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、シロハラトウゾクカモメ、トビ、チュウヒ、カワセミ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ショウドウツバメ、ムクドリ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、オオジュリン、ドバト

以上25種

※シロハラトウゾクカモメは、鳥合わせの時にはクロトウゾクカモメとされたものです。参加者撮影の写真を見ながら改めて検討した結果、修正となりました。

【参加者】 井上詳子、上坂 久・千幸、臼田 正、岡部良雄・三冬、小倉史恵、小山内恵子、門村徳男、鹿野内和弘・裕子・なおみ、川東保憲・知子、北山政人、栗林宏三、佐々木裕子、佐藤伸善、品川睦生、島崎康広、清水朋子、鈴木恵子、鈴木伸子、高橋宣子、高橋良直、竹内強、田中慶洋・ひろ子、田中さちよ、谷岡康孝、辻 雅司、徳田恵美、中正憲信、中田勝義、中村けい子、根本幸子、野村 巖、早坂泰夫・みどり、原 美保、本間康裕、村田睦子、本杉政司・朋子、山下 茂、横山加奈子、吉中宏太郎・久子、鷺田善幸

以上49名

【担当幹事】 門村徳男、栗林宏三

野幌森林公園

2015. 9. 6

【記録された鳥】 オシドリ、マガモ、カイツブリ、キジバト、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、キバシリ、コサメビタキ、キビタキ

以上19種

【参加者】 大朝暁子、後藤義民、小島俊幸、齊藤由美子・佑朱、品川睦生、清水朋子、杉田範男、高田征男、田中洋行、辻 雅司、戸津高保、中正憲信、畑 正輔、早坂泰夫、菱谷紀久子、廣木朋子、本間康裕、松原寛直、本杉政司・朋子、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子

以上24名

【担当幹事】 辻 雅司、本間康裕

いしかり調整池

2015. 9. 13

札幌市中央区 河村 洋昭

今回の探鳥会は職場の友人に誘われて始めて参加しました。朝起きて、窓の外を確認すると結構な勢いで雨が降っていたので「これは中止だな」と思い友人に確認したのですが、今のところ中止の連絡は入っていないとの事。正直、この雨の中観察会が可能なのか心配したのですが、雨の日は晴天よりも鳥たちの活性が上がり、観察に向いているとの言葉を信じて参加することに。

最寄りの駅までJRで移動した後、幹事のSさんに迎えに来ていただき、今回の観察ポイントであるいしかり調整

池に向かいました。現地に到着しても雨足は衰えず、このまま観察できるのか心配でしたが、ベテランの皆さんは何事も無かったように淡々と準備を進められて観察開始となりました。

実際に観察できた鳥はシギやチドリ、カモを中心として、ハイタカやトビの猛禽類、観察会の最後にはカッコウカイツドリで最後まで結論が出なかった鳥など、いろいろな野鳥を見ることが出来てとても楽しいひと時を過ごすことが出来ました。私が見たかったカワセミが観察会では見ることが出来なかったので、Sさんが調整池から駅に向かう帰り道でカワセミが生息しているポイントに案内して下さって、無事カワセミの捕食シーンも見ることが出来ました。そのきれいな瑠璃色の羽と魚を食べるしぐさの可愛さにとっても感動しました。

鳥好きの私にとっては大変楽しく、貴重な1日となりました。本当にありがとうございました。

【記録された鳥】 マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、コガモ、シマアジ、トモエガモ、キジバト、アオサギ、ダイサギ、カッコウ、イカルチドリ、タシギ、オグロシギ、ツルシギ、コアオアシシギ、アオアシシギ、タカブシギ、イソシギ、トウネン、オジロトウネン、ヒバリシギ、ハマシギ、キリアイ、エリマキシギ、トビ、ハイタカ、アカゲラ、ヒヨドリ、ハクセキレイ、カワラヒワ

以上30種

※トモエガモは鳥合わせの時にいなかったのですが、複数の目撃者があり、また、明確な写真が撮られていたので追加となりました。



イカルチドリ 2015.9.13 撮影 中正憲信さん

【参加者】 阿部真美、小倉史恵、金子喜映・洋子、河村洋昭、品川睦生、島崎康広、島田芳郎・陽子、清水朋子、白澤昌彦、高正みちえ、高橋良直、田中さちよ、田中 陽・雅子、田辺英世、辻 雅司、徳田恵美、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、畑 正輔、浜野チエ子、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城・陽子、本間康裕、本杉政司・朋子、渡会やよい

以上33名

【担当幹事】 中正憲信、樋口孝城

宮 島 沼

2015. 10. 4

札幌市西区 小谷内 久江

きっかけは、一羽のアオサギ。何気なく見ていた風景の中に突然羽ばたいた大きな鳥。あの頭にあるシュツとした羽根(?)カッコイイ。その時から鳥に興味湧いて来た。

初めて探鳥会に参加して望遠鏡を覗かせてもらった時の衝撃は今でも忘れません。その時の鳥はカワラヒワ。はつきりくつきり表情まで見えた時は本当に本当に感激しました。今回は宮島沼。天気は目まぐるしく変わり、私はただただたくさんの鳥達を眺めているだけでしたが、担当の方が事細かく見分け方や、その鳥の特徴等を説明して下さい、それを踏まえて再び望遠鏡を覗くと、「あっ分かる、ホントだ!」と自分の目で確認し納得することが出来、野鳥観察3か月目の私は大大満足の日でした。会はお開きになりましたが、天気が回復してきたので観察を続けていると、今まで居なかったハクガンがおりて来ていて、その場が大いに盛り上がりました。

昔に比べて沼の面積が狭くなったり、水深が浅くなったりしたと聞きました。6万~7万の鳥達が沼を埋め尽くすとの事。20年後、30年後も今の様に旅の途中の鳥達の憩いの場であり、私達を楽しませてくれる沼であってほしいと願い、少しでも力になりたいと思いました。

これからも大いに自然に触れ、たくさんの動植物に巡り合いたいと思います。

【記録された鳥】ヒシクイ、マガン、コハクチョウ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、ミコアイサ、カイツブリ、キジバト、カワウ、アオサギ、ダイサギ、オオバン、ユリカモメ、トビ、チュウヒ、モズ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒバリ、ムクドリ、ハクセキレイ、カワラヒワ、アオジ 以上31種

【参加者】阿部真美、今堀魁人、今村三枝子、白田 正、内山英晋、鹿川美咲、金子喜映・洋子、鹿野内和弘・裕子・なおみ、北山政人、栗林宏三、小谷内久江、齊藤由美子・佑朱、佐藤ひろみ、品川陸生、島崎康広、島田芳郎・陽子、清水朋子、高橋良直、田中さちよ、田中 陽・雅子、辻 雅司、戸津高保・以知子、中正憲信、畑 正輔、浜野チエ子、早坂泰夫、原 美保、本杉政司・朋子、吉田慶子 以上37名

【担当幹事】北山政人、佐藤ひろみ

野 幌 森 林 公 園

2015. 10. 11

仙台市 猿舘 直文

探鳥を初めて一年の初心者です。探鳥会に参加させていただき、担当幹事の道川さんに詳しくご案内をいただき、ありがとうございました。

野幌森林公園には、2回目になります。初めて野幌に行ったのは、今年の5月です。会社の中にも、バードウォッチングを趣味にして、写真を撮っている人います。そこで、札幌ではどこに鳥を観に行けばいいのかと尋ねますと、回答が3か所ありました。今の時期なら、海岸で、ノゴマ、オオジュリン。千歳川サケマス孵化場でカワセミ。野幌で、時期は遅いがエゾフクロウ。

ノゴマとオオジュリン、フクロウは見る事ができました。しかしカワセミには会うことができず、代わりに、ヒグマに至近距離で遭遇しました。突然でこちらもビックリしましたが、あちらも慌てており、立木に激突して立ち上がり、そのまま逃げていきました。その後、1時間ほどは動悸して、鳥見どころではなかったです。

話が飛び、クマになりましたが、機会がありましたら、また参加させていただきたいと思います。ありがとうございました。

【記録された鳥】ヨシガモ、マガモ、コガモ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、メジロ、ゴジュウカラ、キバシリ、マミチャジナイ、ツグミ、カワラヒワ、アオジ 以上20種

【参加者】今堀魁人、今村三枝子、大表順子、鹿川美咲、金子喜映・洋子、河村洋昭、栗林宏三、後藤義民、小西美美枝、笹森繁明、猿舘直文、品川陸生、島崎康広、島田芳郎・陽子、清水朋子、杉田範男、高橋さよ子、立田節子、田中さちよ、辻田捷紀、戸津高保、中正憲信・弘子、中田勝義、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、辺見敦子、本間康裕、松原寛直・敏子、道川富美子、山本育子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子 以上39名

【担当幹事】後藤義民、道川富美子

野 幌 森 林 公 園

2015. 11. 1

【記録された鳥】ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、コガモ、キンクロハジロ、カイツブリ、トビ、コゲラ、アカゲラ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、キレンジャク、ゴジュウカラ、キバシリ、シロハラ、ツグミ、ウソ、シメ 以上25種

【参加者】秋山洋子、井上公雄、今村三枝子、大坂博記、大田原勝美、加藤 修、加藤茜湖、金子喜映・洋子、栗林宏三、後藤義民、小西美美枝、小谷内久江、佐藤 勉、品川陸生、清水朋子、瀬川 陸、田中さちよ、田中 陽・雅子、富川 徹、中正憲信、中村 隆、早坂泰夫、廣木朋子、福士一徳、辺見敦子、松原寛直、本杉政司・朋子、山口ちひろ、山本育子、山本昌子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子、吉見孝夫・しの 以上38名

【担当幹事】田中 陽、富川 徹



【小樽港】2016年1月17日(日)

札幌から貸し切りバスを利用して行きます。日和山灯台付近、祝津漁港、フェリーターミナルを回り、海ガモ類、カモメ類、ウミガラス類などを観察します。以下の要領で実施しますので、参加希望者は申込みください。

(今年度から、小樽駅からの乗降を新設しました)
集合場所・時間：札幌駅北口(中央)「鐘の広場」8:00
(小樽駅前からの乗車9:20頃)

帰着時間：16:00頃 (小樽駅前での降車14:40頃)

定員：45名

参加費：2,000円

申込先：畑 幹事

1月5日(火)から8日(金)の毎日9:00~20:00まで電話・E-mailにて受け付けます。

(乗降場所を指定してください。E-mailの場合、電話番号も明記願います)

なお定員になり次第締め切ります。

電話 011-894-0017

E-mail: hata2002@lapis.plala.or.jp

その他

- ・小樽駅で小休止してから探鳥コースに入ります。
- ・フェリーターミナルで昼食をとります。
- ・往復とも小樽駅以外の途中乗車・下車はできません。

【野幌森林公園】2016年2月7日(日)

冬の野幌森林公園を雪を踏みしめながら、ツグミ、アトリ、マヒワなどの冬鳥、キツツキ類、カラ類などを観察します。12時頃に大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。昼食はふれあい交流館でとることができます。

集合：野幌森林公園大沢口 9:00

交通：夕鉄バス 新札幌駅発(文京台南町行)

「大沢公園入口」下車 徒歩5分

JRバス 新札幌駅発(文京台循環線)

「文京台南町」下車 徒歩5分

【円山公園】2016年3月6日(日)

春の訪れを迎えた円山公園内をキツツキ類、カラ類に加え、ツグミ、マヒワ、ウソ、シメなどを観察します。

午前中で解散の予定です。(昼食は不要です)

集合：円山公園管理事務所前 9:00

交通：地下鉄東西線「円山公園」下車 徒歩8分

【ウトナイ湖】2016年3月20日(日)

南で冬を過ごしたガン・カモ類がこの時期北の繁殖地に渡り始めます。渡り鳥の中継地であるウトナイ湖で多くのガン・カモ類、オオワシ、オジロワシなどを観察します。湖岸をネイチャーセンターまで歩きます。正午頃にセンター内で鳥合わせをし、解散となりますが、同じ場所で昼

食をとることができます。

集合：野生鳥獣保護センター前 9:30

交通：道南バス 新千歳空港発(苫小牧行)

「ウトナイ湖」下車 徒歩5分

- ☆ いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。
- ☆ 昼食、観察用具、筆記具などをご持参ください。
- ☆ 問い合わせ先：北海道自然保護協会 ☎011-251-5465
10:00~16:00 (土・日、祝祭日を除く)

鳥民だより

◆新年講演会のご案内◆

・日時 2016年1月9日(土) 13:30~16:30

・場所 札幌エルプラザ 4階 大研修室
札幌市北区北8条西3丁目 (011-728-1222)
札幌駅北口から徒歩3分

・講師 先崎理之氏
(北海道大学大学院農学院/北海道海鳥保全研究会)

・題名 猛禽類は他の生き物の救世主?
- 猛禽類とその他の生き物の保全の関わり -

・講演内容

北海道では四季を通してたくさんの鳥類が見られますが、絶滅の危機に瀕する種類が数多くいることは周知の事実です。しかし、これら全ての種類を別個に保全することは現実的ではありません。そこで、豊かな生態系の象徴である猛禽類の保全を通して、如何にたくさんの生き物を保全できるかに注目が集まっています。本講演では、いつ・どこで・なぜ猛禽類の保全はその他の生き物の保全に役立つのかを、北海道での最新の研究事例を交えながら考えていきます。

・野鳥写真上映会 (講演終了後、15:00頃から)

会員の皆様が撮影された写真を上映します。映写時間を調整するため、映写を希望される方は事前に連絡をお願いします。連絡先：高橋幹事(brb32264@nifty.com)
当日、写真をUSBメモリ等にコピーしてお越し下さい。

・参加費 500円

・懇親会

新年講演会終了後、「ユック」(札幌市中央区北1条西5丁目興銀ビル地下1F)で行います。会費は3,500円程度です。参加自由で、事前申し込みは不要です。

◆ホームページ「野鳥情報伝言板」のリニューアル◆

2016年1月1日から「野鳥情報伝言板」をリニューアルします。従来の伝言板は、当分の間「旧野鳥情報伝言板」として閲覧のみ可能です。皆様の投稿をお待ちしています。

【新しく会員になられた方々】

山根 久佳 (札幌市西区)

小倉 史恵 (札幌市東区)

伊藤 洋子 (札幌市中央区)

【北海道野鳥愛護会】年会費 個人 2,000円、家族 3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465

HPのアドレス <http://www.aigokai.org>